■日　時：２０２０年４月５日（日）
■場　所：立川教会
■説教題：「その男、イエスではない、バラバを釈放せよ。」
■説教者：飯島　信 牧師
■聖　書：旧約 ゼカリヤ書 9：9－10（旧 p1489）
　　新約 ヨハネによる福音書 18：28－40（新 p205）
■**讃美歌**：313**「愛するイエス」**303「丘の上の主の十字架」

お早うございます。
棕梠の主日を迎えました。
イエス様が、十字架に架かる週の初めです。
棕梠と言うのは、木の名前で、「なつめやし」とも訳され、古代においては勝利の象徴でした。岩波の『キリスト教辞典』によれば、棕梠、即ち「なつめやし」は、「キリスト教の勝利、ひいては“永遠の命”“教会”“楽園”を表わ」し、さらに創世記のエデンの園の物語で、アダムが取って食べる「生命の木」とは棕梠の木であったとも記されています。今日のエルサレム入城では、イエス様はこの棕梠の枝を手にした人々によって迎えられます。勝利の象徴である棕梠は、しかしイエス様が十字架に架けられることによって、その後、受難の意味をも持つものとなります。勝利と受難、その両方の意味を持つようになる棕梠の枝を振り、又その枝を道に敷き、人々はロバの子に乗ったイエス様を迎えたのです。

今日私たちに与えられた聖書の御言葉であるヨハネによる福音書第 18 章 28 節から 40 節は、イエス様が同胞であるユダヤ人や祭司長たちから訴えられて、当時ユダヤを支配していたローマ総督の官邸で裁判にかけられ、総督ピラトから死刑の判決を受ける場面が記されています。
読み終えて心に深く残る場面が二つあります。
一つは、イエス様とピラトとの問答であり、他の一つは、ピラトの提案に対する人々の拒絶です。確かに、私たちが聖書から知らされるのは、神様の独り子であるイエス様が十字架に架けられて殺されるその意味です。しかし、その一方で、神様によって定められたイエス様の道行きではあっても、そこに関わる私たち人間の赤裸々な姿を改めて見出すのです。

まず、イエス様とピラトとの問答です。
33 節から 38 節までを読みます。

３３：そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエスを呼び出して、「お前がユダヤ人の王なのか」と言った。
３４：イエスはお答えになった。「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、

ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか。」
３５：ピラトは言い返した。「わたしはユダヤ人なのか。お前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。いったい何をしたのだ。」
３６：イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない。」
３７：そこでピラトが、それでは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」
３８：ピラトは言った。「真理とは何か。」

まるで、噛み合っていない二人の問答です。
ピラトは、イエス様がなぜ同胞のユダヤ人や祭司長たちから訴えられたのか、しかも、極刑である死刑を求められるほどまでの訴えの理由は何かを知りたいと思いました。ピラトからすれば、死刑に相当する重大犯罪と言えば、国家反逆罪です。即ちローマ帝国の総督下にあるユダヤで反乱を起こし、ローマ帝国を転覆させる謀反を企む以外に考えられませんでした。そのことを企て、ユダヤ人の王とお前は自称したのかと重ねて問うのです。
それに対するイエス様の答えは、自分は、神様から遣わされ、神の国の真理を証しするためにこの世に来たとの言葉でした。
ピラトが、人間の築き上げた地上の帝国に関わる答えを二度も求めたのに対し、イエス様は、いつかは滅び去る地上の帝国ではなく、永遠に続く神の国について語ります。そして、ピラトは、イエス様の語られた言葉の意味が理解出来ないまま、次の段階へと歩みを進ませるのです。
「真理とは何か」との問いを携えたままにです。

私は、この段階で、総督ピラトに人としての見過ごせない過ちを見ます。
それは、一人の人間の命に対する向き合い方の軽さであり、自分に課せられた務めを放棄したことです。ピラトは、イエス様の答えから、ローマ帝国を転覆させる国家反逆罪のような、即ち死刑に値するようないかなる罪も見出すことは出来ませんでした。そうであれば、ユダヤ人たちの訴えを退け、イエス様に無罪を宣告しなければなりません。にもかかわらず、ピラトは、有罪か無罪かを決定しなければならない自分の責任を放棄し、人々に判決の最終判断を任せるのです。責任からの逃避であり、自分の地位と権威を守るために自己保身の世界へと逃げました。

二つ目は、イエス様を釈放して良いかと言うピラトからの投げかけに対するユダヤ人たちの応答です。「その男ではない。バラバを」釈放せよ、と答えたのです。

エルサレム入城の時からわずか 5 日目。あの棕梠の枝を振り、歓呼の声を上げたと同じユダヤ人たちです。いかに、イエス様の命を付け狙っていた律法学者や祭司長たちに唆（そそのか）されたとは言え、ある時はイエス様が語る言葉に耳を傾け、又ある時はイエス様の成された奇跡の業に驚嘆し、「ホサナ。主の名によって来られる方に祝福があるように、イスラエルの王に」とまで叫んだ人々です。

彼らが、「その男ではない。バラバを」と叫んだその時、彼らが手に持って迎えた棕梠は、勝利の印から受難の印へと変わりました。

この時、私は思います。

受難節を迎えた今日、この棕梠の枝は、今私たちの手に渡されていると。

私たちは皆、この棕梠の枝を持って、イエス様を迎えています。

この枝を、最後まで、神の国の真理を私たちに告げ知らせ、救いの道へと導く勝利の枝として手に持ち続けるのか、それとも「その男ではない。バラバを」と叫ぶことによって手に持つ棕梠を受難の印としてしまうのか、そのことが問われています。

主イエス・キリストの十字架を仰ぎ見つつ、しかし、二度とイエス様を自分の犯す罪の故に十字架に再び架ける者とならないことを心に刻み、与えられた信仰の人生を共に生きて行きたいと思います。

祈りましょう。